

ですから私が今注目しているアジア太平洋地域の讚美歌の普及にとって、独身の女性宣教師の活躍が非常に大きなウエイトを占めている、そういう風に考えています。

§ 13 どんな人が宣教師になったのか

— それにしても当時は十九世紀ですから、全く風習も言語もいわゆる文化が全く違う地域に出かけて行って、全く別の宗教をその人たちに布教する、信じこませる、よくもそんな活動をと普段の私たちの生活からは考えられないのですが、その辺りはどうなんでしょうか。

もっともな疑問だと思います。私も自分の研究の必要からキリスト教海外伝道についていろいろ本を読んだり文献を調べたり、時には宣教師が書いた手紙を読んだりして、普通の人よりは知識があると思いますが、まだまだ分からないことだらけですね。表面的なことでは、そもそもキリスト教は、誕生直後から海外への布教とそれによって受けた迫害の歴史がずっと続いている宗教です。今で言うパレスチナで起こった新しい宗教はそこからギリシア世界、ローマ世界へと広がって行きます。それはキリストの弟子たちの伝道活動ですね。その時、根拠になったと言われている聖書の文句は「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなければ」、マタイ二八・十九でした。(『新約聖書』 日本聖書協会、以下同様)

—それは分かります。でも生まれたばかりの宗教と、それから何百年も経った十九世紀では意味が違うと思うのです。私が教えて欲しいと思うことは、彼らをそこまで駆り立てた情熱、簡単に言ってしまうえば信仰の力なのでしょうが、それだけでは納得出来ませんよね。そこまで彼らを駆り立てた何か原動力、今の言葉で言えばモチベーションが何だったのか。その辺りを私たちがなるほどと実感出来るような材料はないのでしょうか。

そうですね、私の個人的な体験で言いますと、ある本を読んだ時少し納得がきました。こういうことだったんだ、と納得がきました。それをお話する前にですね、キリスト教海外伝道というのはイギリスでは十八世紀後半に起こってききますし、アメリカでは少し遅れて十九世紀はじめに起こってききますが、そうした運動は例えばアメリカの例で言いますと、宗教に対して非常に保守的、古い考え方を頑固に保とうとしている人たちが行った運動だということを、まず頭に入れておいて下さい。

十九世紀というのはご存知のように科学がどんどん発達していきますし、産業も発展し、資本主義社会がどんどん成長します。それを背景に宗教色は社会からどんどん薄れてきた時代です。そういう時期に危機感を覚えて、このままではいけない、キリスト教をもっと盛んにしよう、本来の形を守らなければいけないと考えた保守的な人たちがはじめた運動だったのです。

パール・バックの家族の写真(1901年頃)
Pearl S. Buck International 提供



—それは私たちがなんとなく宣教師に抱いている、頑固で厳しいイメージとよく重なりますね。

そうだと思います。彼らが保守的な宗教家だったことをまず頭に置いてもらって、私がさつき言いかけた体験でなるほどと思ったのは、今の若い人たちはほとんど読まないかもしれませんが、パール・バックというアメリカの作家がいます。代表作は『大地』で、それでピューリッツア賞をもらったり、ノーベル文学賞も受賞した作家です。

パール・バックは中国に伝道に行った宣教師の家庭で育った女性です。彼女が自分の父、中国に伝道に行った宣教師ですが、その父について書いた本があります。今は出版されていなくて、絶版ですので、図書館で読むか、古本屋で見つけるしかないのですが、日本では『戦える使徒』というタイトルになっています。「使徒」と訳されている元の言葉はエンジェルです。直訳すれば「戦う天使」ということになります。お父さんのいわゆる伝記を書いたものです。この本を読んだ時に、宣教とはこういうことだったのか、宣教師になるといえるのはこういうことだったのか、とはじめて納得しました。

—でしたらその一節を紹介していただけませんか。

ええ、そう思ってここに用意してあります。パール・バックのお父さんがどうして外国宣教師になったのか、そのきっかけを述べた件があります

ので、それを紹介します。

その前にその件の背景になっている事実をお話しした方がいいと思います。つまりキリスト教海外宣教師が任地に行つて例えば十年くらい活動したとします。宣教師の活動はとても厳しいものです。報告書の表面にはあまり出てきませんが、身体や精神を壊した例も少なくないと思います。で、十年くらい働くと、今、大学でもその制度がありますが、サバティカルと言って一年間の休暇がもらえます。宣教師は休暇で本国に一旦帰りますが、宣教師の場合、休暇といつても完全な休暇ではなくて重要な任務があります。本国で自分たちを支援してくれる教会を回つて、自分たちが例えば中国でどんな活動をしてどんな成果をあげたのか、現地の人々がどのように素晴らしく変わったのかを講演して回ります。それによってお金を出した教会員たちの満足を満たします。

さらに自分の後に続いてくれる次の宣教師候補を募集しなければならない。そのために機運を盛り上げるといいますが、いわゆるキャンペーンをしなければいけない義務がサバティカル中にあるわけです。

パール・バックに話を戻しますが、彼のお父さんはアンドリュウという名前ですが、アンドリュウが宣教師になったのは、今私がお話したこと関係しています。つまり任地から本国に戻ってきた伝道師のキャンペーンに彼は遭遇します。